

学校評価総括表(令和2年度)

奈良県立畷傍高等学校 (定時制課程)

教育目標		日本国憲法・教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、人権の尊重を基底とした民主的な社会の形成者としての必要な資質を養い、豊かな文化の創造に寄与する心身ともにたくましい生徒の育成をめざす。			総合評価		
運営方針		知・徳・体の調和のとれた、自主的・創造的で心身ともにたくましく活力ある生徒を育成する。					
令和元年度の成果と課題		本年度重点目標		具体的目標			
○定通併修三修制度により7名が卒業、他校入学による退学1名を除き全生徒が進級し、生徒の学習成果の充実が図れた。令和2年度から生徒の三修制の希望により応えるべく0限目授業を設定、また1授業時限を延長した学習環境の充実を図れた。		○規範意識の向上を図る。		○基本的な生活習慣の確立を促す。 ○社会のルールやマナーを身に付けた生徒を育成する。			
○生徒の学力の向上や基本的な生活習慣の確立を目指す取組を継続し、適切な支援を行いたい。		○自他を尊重する心の育成を図る。		○各生徒の悩みや課題の把握と理解に努める。 ○お互いを支え合い、信頼し合える人間関係づくりを促す。			
		○基礎・基本の定着と進路希望の実現を図る。		○確かな学力を身に付けさせるため、魅力ある授業を行う。 ○将来を見通した進路希望の実現を援助する。			
		○教職員の資質と指導力の向上を図る。		○授業公開や研修会などを積極的に行い、自ら指導方法の改善に努める。 ○常に研鑽に努め、自ら資質の向上を図る。			
具体的目標		具体的方策・評価指標		自己評価結果	成果と課題	改善方策等	学校関係者評価
教務部	本校の特色を生かした教育活動が行われるよう、工夫改善を行う。	学校行事の円滑な実施と効率的な授業展開ができるよう、日程調整や時間割編成上の工夫を行う。	B	B	今年度は感染症防止に配慮しつつ、授業や学校行事を行うこととなった。来年度以降、一層、ICTの活用についても研修を深めていく必要がある。 次期学習指導要領の円滑な実施に向けて、検討を始めることができた。今後は、令和4年度の実施に向けて調整を進めていく。	生徒が学習活動においてICTの活用を進めていくことができるよう、積極的に働きかけていく。 校務支援システム「賢者」については、観点別評価等においてさらに活用が進められるよう、情報共有をはかる。	
		次期学習指導要領を踏まえ今後の教育課程について具体的に検討する。	B				
生徒指導部	規範意識の向上を目指し、集中・安心して学べる学校づくりを目指す。 生徒指導に関わる情報を全職員が共有し、様々な事態に迅速に対応できるようにする。	校門での立哨、校内・通学路の巡視を定期的に行う。学警連携を密にとり、地域の警察との連携を深める。	B	B	校門立哨は十分行うことができなかったが、校内外の巡視を継続して行うことができた。警察とはスクールサポーターを通じて密に連携をとることができた。 夕礼・会議等を通じて多くの情報共有を行うことができたが、ケースによっては不十分であったと感じる。	校務分掌等の役割分担や部活動との兼ね合いも踏まえながら校内外の巡視体制を構築していく。 今後もこのような情報共有の体制は継続していくが、どの程度まで情報共有をすすめるか検討を重ねる必要がある。	
		夕礼等で生徒指導の動向や生徒の情報を共有し、迅速に対応できる体制を整える。	B				
進路指導部	生徒自らが自身の適性を知り、それを生かした希望の進路に進むことができるように、進路学習への前向きな態度を養う。	HR活動など自分の適性について考える機会を提供し、それを生かせる場所について考えさせる。	A	B	Cパスポート・eポートフォリオの実施、進路講演会の実施等で、生徒自身が進路について関心を持つようになった。	Cパスポート、eポートフォリオの記入項目等について、来年度のLHRや学校行事も考慮し、さらに改善をしていきたい。生徒の情報選択スキル(特に就職)については、奈良の企業を探究する活動等も考えられる。進路講演会の内容についても、より生徒の実態やニーズに合った内容となるよう工夫を加えていく必要がある。さらに感染症流行に伴う制約に対し、就職・進学オンライン面接等への対応や生徒への指導も進路指導部内で検討しておくことが考えられる。	
		進学・就職に関する情報の収集と選択について理解させる。	B		教員側の情報提供による進路の選択支援・決定がほとんどであり、特に生徒の情報選択スキルの獲得は今後の課題である。		
		希望の進路先を調べたり見学することで、社会人として活躍できる素養を育成する。	B		進路講演会での模擬面接・卒業生の講話会実施は効果があった。しかしweb等を利用した進路研究については、今後の課題である。		
人権教育部	メディアを通して伝わる様々な情報を正しく批判的に読みこなし、その中から多様な価値観を理解させる。自分や他人の人権をお互いに尊重できる実践力を身につけさせる。	自分と相手の違いを認めながら、思いやりのあるなかま作りを目指す。	B	B	生徒が自身の言葉で意見を発表し、他者との意見交換できるような機会がもてなかった。	校内での生活体験発表会や、生徒の編集による人権機関誌の発行など計画する。	
		講演会や映画会を通して人権について考えさせ、自分の考えを創造的に、効果的に発信できる力を身につけさせる。	B		多様な性や新型コロナウイルス差別と偏見について全校で足並みを揃えて生徒への展開ができた。		
保健体育部	体育的行事を行い、生徒間の交流を深める。 自らの身体の健康について理解させ、健康の保持増進を図る能力を育成する。	スポーツ行事を年2回実施する。	A	B	感染対策などを徹底し体力テスト・ボウリング大会を実施し、学年を超えて、生徒同士の交流を深めることができた。 全生徒に実施することができなかったが、自分の運動能力に興味・関心を持たせることができた。	目標の設定をより明確にし、より多くの生徒が自ら参加できるよう努める。 健康的な生活習慣の確立を目指し、自らの体調管理と運動、食事や睡眠の重要性を本人が自覚・実践できるように指導していく。	(本年度、「新型コロナウイルス感染症」に係る対応等で実施した取組及び経験を、次年度も活かしていきたい。)
		身体測定や健康診断の結果をもとに、自分の身体状況や健康状態を把握させ、健康な生活を行うよう指導する。	B		自分の健康状態を把握できている生徒が多いが、健康的な生活を実践できていない生徒には指導を行った。		
第1学年	基本的な生活習慣の確立と高校生としての自覚を持たせる。 集団生活における規律や協力について理解を深める。 生徒が教員に相談したり、話しやすい環境づくりを目指す。	保護者との連携を図り、欠席・遅刻・早退や問題行動の減少を図る。	B	B	保護者との連携は図れたが、生徒の欠席数減少にまでは至らなかった。 挨拶をする生徒は増えたが、クラス内の協調性を十分に育むことができなかった。未だ、協調することの重要性を理解できていない生徒が見受けられる。 始業前などに生徒からコミュニケーションを図ってくるが多くなった。それが学級経営の一助にもなっている。だが、担任だけではそれらを全て把握する事が難しかった。	出席の重要性についてより深く生徒達に話し、自覚させる機会を設ける。特に、HR以外の場面などにおいて個別で話をしていく。 協調性を向上させることができるようなHR活動を取り入れる。今年度は新型コロナウイルスの影響により、密を避けて活動を行ってきたが、今後はグループ活動等を積極的に活用していく。 各教科の担当者にも協力を仰ぎ、生徒の情報収集に努める。特に、教科別での様子を重視し、問題行動等を未然に防ぐ。	
		挨拶やマナー等の大切さについて具体的に指導し、生徒の協調性が向上するクラス運営を図る。	B				
		生徒と教員間のコミュニケーションを十分に図ることで、生徒の変化を早く発見し、適切な対応ができるようにする。	B				
第2学年	自らの進路について、意識づけを行う。 学校生活での規範意識の向上を図る。	進路講演会やHR活動、個人面談を通じて、積極的に進路の情報を提供し、進路選択の重要性を、生徒自らが考えられるようにする。	B	B	希望進路が決まっていない生徒もあり、進路に関する情報を提供しても自身のことと捉えられている生徒が少ない。 繰り返し指導することで、少しずつ起立・礼の態度や挨拶などができる生徒が増えてきている。	個人面談等で、希望進路が未定の生徒には早めに進路選択することの重要性を伝えていき、希望進路が決定している生徒には進路情報を積極的に提供していきたい。 コミュニケーションの重要性を説明し、コミュニケーションの基本が挨拶や態度等であることを理解させ、生徒自らが率先して挨拶ができるような環境を作っていく。	
		SHRや授業での起立・礼の徹底や挨拶など授業を受ける態度の指導を行う。	B				
第3学年	規範意識を高める。 確かな学力を身につけさせる。 進路について、方向性を確立させる。	卒業に向けて必要な生活態度・礼儀やマナーとともに、責任ある言動を身に付けさせる。	B	B	日ごろから挨拶を確実にし、進路指導などの場面でもマナーの指導を進めた。 夏休みなどに補習を行なった。生徒個人の課題に応じた教材研究をさらに進める必要がある。 個人の希望を尊重した進路指導を行うことができた。	進路未定の生徒に対しての指導を重視する。 特別支援教育などの研修を通じて、学力補充についての知識を深める。 新型コロナウイルスなどで社会不安が顕在化しているが、正しい情報をもとにして希望が持てるような助言に心がける。	
		学び方を指導する。表現力を高めさせる。	B				
		具体的な情報を提供し、考えさせ、選択させる。	A				
第4学年	高校生活最後の1年間の充実と進路の実現を図る。	社会人として必要な生活態度・礼儀やマナーとともに、最上級生として責任ある言動を身に付けさせる。 進路情報伝達や進路相談を行い、生徒の主體的な進路実現ができるよう指導する。	B A	B	最低限の生活態度・礼儀やマナーを身につけることはできたが、さらなる向上を図ることはできなかった。 面談だけでなく、授業前後の時間を利用して生徒の希望や目標を聴き、それに向けた心構えや行動の指導を行った。	生徒の言動など変化に注意を払いながら生徒の理解を図れるように努める。 卒業後は自分の判断で選択、決定をしなければならないので、主体的に行動できる生徒を育てるように努める。	

具体的目標		具体的方策・評価指標		自己評価結果		成果と課題		改善方策等		学校関係者評価
国語科	漢字の習得に対しての関心を高め興味をもたせる。	自分の考えを文章に表現させる。		B	B	ワークシートを用意したり、定期考査に作文問題を設けたりして、文章表現の機会を増やした。フィードバックの実施方法が課題である。		文章表現力をさらに高めるため、きめ細かな添削や指導を行う。		(本年度、「新型コロナウイルス感染症」に係る対応等で実施した取組及び経験を、次年度も活かしていただきたい。)
	コミュニケーションを図り意見の交流を大切にする。	理解してわかることのおもしろさを感じて取り組む態度を養う。		B		文章読解だけでなく語句の学習などでもコミュニケーションの機会を増やした。グループ学習や発表の機会はあまり設けられなかった。		三密を避けた発表や意見交換の方法を開発し、実施する。		
地理歴史科	生徒にとって身近なことから、興味や関心をもたせる。	各種メディアの資料、視聴覚教材の積極的活用を図る。		A	B	パワーポイントや指導内容に関連する視聴覚教材を活用することで生徒の学習に対する理解を深めることに繋がった。		座学を苦手とする生徒が多いため、よりわかりやすい視聴覚教材や学習教材を開発する。		
	時代や国々による相違点を認識させる。	美術・文学等の教材を取り入れ、文化的教養を高めることを目指す。		B		文化史について興味を示す生徒が少なかったため、生徒が反応を示す教材を追究する必要がある。		視聴覚教材などを再検討し、生徒が興味を示す教材等を開発する。		
	歴史認識を基礎に幅広い知識を身につけさせる。	考えや思いを文章化できるようになることを目指す。高卒認定制度の受験対策を併せて実施する。		B		授業プリント、定期テストに記述問題等を入れ、生徒の作文能力を向上させるように指導したが、答えを写すなど主体的に文章を書く生徒が少なかった。		各学年の担任とも連携し、生徒が作文をする機会を増やしていく。		
公民科	生徒が授業に興味・関心を持つように、時事問題を適時取り入れ活用する。	最新のニュースや統計、情報などに注目し、授業に活用が可能な話題を積極的に取り入れる。		B	B	始業時に学習内容と関連する時事問題を適宜取り上げ、生徒の考え等を質問したが、ニュースなどに興味を示す生徒が大変少ないということが分かった。		教科書や資料集の統計などを読ませて、自分の考えを書くことができる授業プリントを作成する。		
	基礎的知識の習得を図るため、教材や資料を精選する。	都道府県の位置や県庁所在地など、基礎的な知識の定着を図る。プリント教材等の活用を積極的に取り入れる。		A		授業プリントや定期テストに都道府県や県庁所在地を問う問題を入れ、基礎的知識の定着を図った。漢字では覚えきれなかったが、ある程度の定着が見られた。		日頃から文字を書く習慣が少ないため、漢字を書く練習を行う時間をこれまで以上にとっていく。		
	現代社会の問題や課題を、主体的に学ぶ視点を養う。	意見交換等を通じて、自ら問題に対応する力を身につける。		B		簡単な問題は意見交換が進んだが、公民科の基礎知識を必要とする内容では話が深まらなかった。習得に重点を置いた上で活用できるような授業を検討する必要がある。		基礎知識をある程度定着させるための時間をこれまで以上に取った上で、意見交換等ができる授業を組み立てていく。		
数学科	基礎的な技能の習得を図る。	基礎的な内容から説明する。		A	B	各分野において、基礎的内容の復習から実施したが定着に至らなかった生徒が多い。		授業で扱う内容をより生徒の実態にあったものにして、知識の定着を確認できるような課題の作成を心がける。		
		自らの手で問題を解く習慣を付けさせる。		B		練習問題を解く時間を設定し、自ら解こうとするよう一部補足を行いながら行った				
理科	基礎・基本的な事柄の習得を図る。	既習事項の定着を重点的に行う。		B	B	単元・授業毎に記述・発問等による振り返りを行うことで、基礎的な知識の定着を促すことができた。		基礎基本事項の習得を目指し、振り返りの方法を工夫していく必要がある。		
	学習したことを日常生活に活かす力を養う。	科学ニュースや日常生活と関連する学習事項を多く取り入れる。		B		プリントの活用や科学番組の紹介によって、学習内容を日常生活と結びつけて理解させることができた。		日常生活に関連する科学知識を今後も取り上げていく必要がある。		
保健体育科	授業を通して集団の一員であることを理解させる。	集合・整列等の集団行動を実施し、迅速な行動を身につけさせる。		B	B	集合・整列・挨拶等ある程度習慣化させることができた。		引き続き、はじめをつけることの大切さを理解させ、必要な集団行動を身につけさせられるよう努める。		
	運動をすることの楽しさ、喜びを味わうとともに、出来た時の達成感を体験させる。	主として球技種目を実施し、生涯に渡って運動を続けていける力を身につけさせる。		B		球技を中心にルールを守り、安全に運動させること及び、楽しさを感じさせることができた。		更に、生徒自らが積極性を身につけ、生涯スポーツの実践に繋げていけるように授業を進める。		
芸術科 (書道科)	書の基礎的な表現力を養う。	古名蹟を手本にして習わせる。		B	B	在宅教材に加え、授業でも学ぶことで、一つ一つの古典について深く学習できた。		プリント教材は生徒により学びの深度が異なるため、スモールステップを意識した教材作成に努める。		
	書を通して自己を表現する。	漢字仮名交じりの書を書かせる。		C		コロナ禍における時数の減少により、漢字仮名交じりの書の創作や相互鑑賞に十分な時間を取るができなかった。		鑑賞の場でなくても、互いの作品に関心を抱き、互いの良さを発見、認め合えるような環境づくりに努める。		
		基本的な表現力を定着させる。		B						
英語科	中学英語からの基礎・基本を大切にしながら、高校英語にも、主体的に授業に参加する態度を養う。	定着を図るために復習に重点を置き、小テストや Reading のテストを実施する。		B	B	復習の小テストは定着して、生徒はまじめにとりこんでいる。		安定して実施できるように準備する。		
	0時限目の授業を通して、英語に対する興味・関心を引き出し、成績の向上を図る。	Listening と Speaking に十分な時間をかけ、英語会話の実践力を身につけさせる。		C		生の英語音声に触れさせる機会がなかった。		音響機器の利用により英語原音に触れる機会を増やす。		
家庭科	生活に関する基礎的・基本的知識と技能を習得させ、人との関わりの中で、生活者としての自覚と責任のある人間を育てる。	食育を中心に家族、保育の重要性を認識させ、賢い消費者としての実践力を身につけさせる。		B	B	基礎・基本の知識、技術を身につけ、適切な価値判断と意志決定する力を身に付けることができるよう取り組んだ。		自立に向けて実習やグループワークを通し、コミュニケーション能力を身につけ、現在及びこれからの生活を実際につくっていく力を養うように努めたい。		
		特に、主体的な消費、行動、消費者の権利と責任、資源、環境など、ライフスタイルを考える力を育てる。		B		食生活、子育て支援、防災の学習を通して、多くの人々と関わり合うことの大切さを考えさせた。				
情報科	情報技術を活用して、情報社会に主体的に参画するための資質・能力を育成する。	情報を活用して問題を発見・解決する方法を身につけさせる。		B	B	データの活用事例を示すことで情報活用について考えさせたが、実際に適切に情報を活用できるかについては課題が残る。		総合的な探究の時間、各教科・科目などと連携し、情報科以外の授業時間でも具体的な問題解決学習を行う機会を増やす。		
		個人の果たすべき役割や責任について科学的に捉え、理解させることで、情報モラルを身につけさせる。		B		適切なSNSの使い方など情報モラルについて考えさせたが、生徒の行動変容につながっているか十分に評価できていない。				
商業科	ビジネス活動に必要な知識や技能を習得させ、社会人として必要な素養の育成を目指す。	各科目の学習内容において、基礎・基本を重視し、演習や実習を通して、知識と技能の定着を図る。		A	A	教科書と視聴覚教材、コンピュータ実習を中心に基礎・基本の学習を進めた結果、知識・技能について一定の定着が図れた。		ビジネス活動における計数的知識の定着に加え、電卓などの計算用具の機能および計算知識・技能について、生徒がより興味・関心を持てるように指導方法・教材などを改善・工夫していく必要がある。さらにより実践的なビジネス活動が理解できる視聴覚教材なども研究していきたい。		
		ビジネス活動を計数的側面から理解させる。		B		数学への関心が低い生徒が多い学年もあり、レベルの確認や小中学校の内容を理解させる必要を感じた。				